資料８

第2回子ども･若者審議会からの意見

１　評価・検証の流れについて

・西東京市は、公園、まちづくり、教育など、子ども・若者に関する取組を幅広く行っている。他の自治体のまねではなく、西東京市に合った価値のある取組にする必要がある。
・提言を生かすには実行する意欲が欠かせない。市の内部組織である子ども・若者施策推進本部で議論できることは、西東京市の強みである。子ども・若者の意見をさまざまな形で聞き、意見交換できる仕組みをつくるのが良い。
・子どもが何に困っていて、どのような状態にあるのかを把握することが重要である。子どもが大人に気をつかったり、大人を支える側に回ったりしている状況がある。そのため、幼児や小学生の意見をしっかり聞き、中高生につなげていく必要がある。
・評価は、市から相対的に独立した組織で行うことが大切である。
・子ども・若者を中心に、推進本部と審議会を結ぶ仕組みのつくり方と続け方を、専門部会で検討してほしい。特に、学校、学童、児童館などの子どもの意見を審議会に届ける方法も併せて考えられると良い。

２　子ども・若者の評価を受ける方法について

・過去には、市民まつりで小学生が「子ども記者」としてインタビューし、記事にする取組があり、多くの意見が集まった。ワイワイトークを武蔵野大学以外の場所でも開き、新しい視点を取り入れてはどうか。
・まずは参加の間口を広げることが大切である。
・児童館で行っている子どもとの話し合いを広げ、各児童館の代表が集まる市の会議につなげる方法なら、参加しやすくなるのではないか。
・最初から「市の会議」として呼びかけると参加しづらい。土日は家庭の予定もあるため、平日の児童館や学童で経験を積んでから市の会議へ参加する流れがよいのではないか。
・大学生が関わる場合は、最初に一緒に遊ぶ時間をつくり、関係ができてからテーマについて話すなど、段階を踏むほうがよい。
・1 回で 3 テーマは負担が大きいため、分かりやすいテーマから計画的に取り組むほうがよい。
・子どもが通い慣れた場所から始めると、保護者も参加させやすい。児童館職員など現場の声を取り入れ、現場の取組を充実させるのもよいのではないか。
・学童では、卒業イベントに向けた「4 年生会議」で、子どもが中心となって企画や準備をしている。こうした活動に市役所の職員が加わり、その場で市の子ども会議でへの参加を呼びかけてはどうか。
・社会福祉協議会のボランティアセンターでも見られることだが、内申点につながるなどの特典がある夏のボランティアが学生の参加も多い。参加者にとってのメリットを用意することが有効である。
・活動内容を自分で選べることが大切で、市を知ってもらう機会にもなると良い。
・保育園や児童館など、子どもの身近な居場所から意見表明につなげる方法も検討してほしい。